先進繡像
玉石雜誌

仮篇

三

和書門
類 三六七一三
號 一四一
函 一四
架 一〇
冊

内閣文庫
和書
類 三六七一三
號 一〇
冊 一一
架 一五八
函

18

地
一
八

内閣文庫
番號 和 36713
冊數 10 （8）
函號 158 212

日本政府圖書
内18

先進繍像玉石雜誌續篇巻第四目録

真田彈正忠幸隆壽像
滋野皇子　滋野姓　海野　祢津
望月　眞田三代記乃誤　長野系圖
山本晴幸の別傳二条　一騎丈人乃いわれ
内山乃大井　岩尾乃大井　平原　芦田
小田井又六郎　室賀　丸子　矢沢
武石　小泉　戸石軍　志賀乃笠原
村上本領　飯田河原合戦　會圖乃小旗
須乃原兄弟村上勢をあざむく　上田原軍
長尾景虎生立　武田家軍法　近院右府

皇朝三軍　将軍乃称　五軍　大臣大連
伴部物部　宮衛直兵　小荷駄乃積り
軍行五里　龍の丸備　あけ螺　雉子追
會圖の狼煙　神箭砲　火攻　火獣
宿曜孫子ニ出しを　木革砲　本卦當卦
命期經　坂東八平氏　受領官途乃許状
受領國司巡行

先進繍像玉石雑誌續篇巻第九目録終

真田弾正忠幸隆壽像

信州皆掛林氏藏

真田弾正忠滋野幸隆ハ海野左京大夫幸義乃男なり永正十年癸酉歳信濃國小縣郡上田ニ誕ス母ハ上野國吾妻郡羽尾住人羽尾入道乃女なり童名小太郎

千曲真砂上田城乃条ニ海野氏代々当地ニ居海野先祖ハ清和天皇第四皇子貞保親王なり滋野皇子と號す延喜二年壬戌歳正月十三日薨御其の後小縣郡祢津戌亥方山上ニ葬る今宮峯の山陵と號す後ニ正宮権現と崇祀る此親王信濃國司とならせ給ひしより代々祢津御ニ住せと見ゆ甲斐國志人物の部ニ海野氏傳ニ云く清和天皇第二皇子貞固親王を滋野天皇と號す或ハ第六皇子貞元親王の御子善淵公延長

年滋野姓を賜ふと云又ハ貞保親王なりとも云又ハ貞秀親王とも云善淵乃後數世ニして海野幸恒ニ至るとも云或ハ貞元滋野姓を賜ふ其子を海野小太郎幸恒と云とあり今按ニ海野氏の祖ハ貞保親王と云説正義とすへし貞保親王乃母ハ皇太后藤原高子枇杷贈太相國藤原長良公乃第二女昭宣公乃妹なり陽成院の同母弟なり貞觀十二年庚寅歳九月十三日誕生十八年正月廿一日親王となり左京一条一坊ニ貫隷せられ其宮町乃南ニ在を以て南宮と称し又山城葛野郡桂里ニ山荘を営して住玉へは桂親王とも云龍笛ハ古部春近の品玄を摹され堪能ニ在しかは

南宮竹譜の撰著ありて世に傳ふる也。秦箏ハ大唐咏
陽縣孫賓の和聲を御文清和天皇に受まゐらせ。琵琶ハ大
唐琵琶博士廉承武の撥刺を掃部頭貞敏の女より傳
へしかハ、各其血脉をあらはせり。二品式部卿の時、延
長二年六月十九日五十七歳にて薨せられし由、日本
紀畧に見ゆ。又曲真砂に、延喜二年四月十三日と云ハ
誤なるへし。親王の御子に菊宮と云ましまして、母ハ嵯
峨天皇第四皇子恒康親王の女とあり。但紹運録を考
ふるに、嵯峨第四の皇子ハ無品基良親王と申して、日本
紀畧に天長八年六月庚辰薨と見ゆ。其女是歳生るへく
とも貞保親王に長せること四十年余りの配偶せへからん

然らハ嵯峨の皇孫と云説ハ信し難し。恒康親王と云
ハ仁明天皇の皇子常康親王を云か。常康親王ハ仁壽
元年に出家し給ひ、貞観十一年五月十四日薨し給
ふ。家いまた女子あらは、是も亦貞保親王に長せること廿
歳餘に及ふへし。菊宮の子を善淵王と云。正三位
の大納言にして滋野の姓を賜せられし人と云。紹運
録にハ貞保親王の所生ハ源國忠、源國珍、基淵三人を
載て菊宮なし。基淵ハ善淵と同人なるへし。然るとも
正三位の大納言と云ハ誤なるらん。公卿補任に載さる
ハなり。且滋野姓も爰に始て賜ひしにあらす。姓氏録
に右京神別の下、滋野宿禰ハ紀直と祖を同くす。神魂

命五世孫天道根命の後なりと注せり。又大和國の神
別に伊蘇志臣と云あり。滋野宿禰と同祖と注す。延暦
十七年從五位上伊蘇志臣家譯。改めて滋野宿禰の姓
を賜はり。弘仁十二年に宿禰を朝臣と改め賜へりと
る家譯の三男を從四位上攝津守滋野朝臣貞雄と云
貞雄の女。文德天皇に侍して源本有。源載有。及び源滋
子を産と。三代實録に見ゆ。又海野と云は。小縣郡童女
御なりと云り。善淵の子を滋氏と云。母は大政大臣藤
原基經公の女と記せり。滋氏の子を從三位為廣と云
為廣の子を從四位下左衛門尉為道と云。為道の子を
武藏守則廣と云。則廣の子を検非違使重道と云。重道子

男子三人あり。長子海野小太郎廣道。二男祢津左衛門
道直。三男望月三郎重直なり。海野は洲濱を以て紋と
なし。祢津は九曜を用ひ。望月は七曜を用ゆとかや。廣
道の長子。海野小太郎幸恒。その子幸明。是は小太
郎と称し。後に信濃守と云。其子幸真。その子幸盛。その
子幸家。その子幸勝。まく文代の際小太郎信濃守と云
は現任の國司なりして。成功の爵なるへし。幸勝の子
海野小太郎幸親。保元の軍に。下野守義朝の手に属し
望月。根津神平と共に。内裏へ參り。鎮西八郎の囲めし
白河殿の西門にて戦ひて功あり（保元物語に見えたり）幸親の子を
海野弥平四郎幸廣と云。木曽義仲に從て。筑摩川を渉

り城の太郎資永を討破り備中國水島の軍に大手の
大將軍として村田の兵衛盛房と組討せしが飛騨の
三郎兵衛景家に討れけり幸廣の子小太郎幸氏ハ
木曽義仲の長子志水冠者義高の鎌倉に質として赴
くに随ひ後に從五位下に叙し左衛門尉に補せられ
弓馬の藝をもつて世に賞せらる幸氏の子幸繼左衛門尉
信濃守たり會田・塔原・田沢・刈屋・岩下等の氏の祖と云
幸繼の子小太郎幸春その子幸重其の子幸康その子
幸遠其の子幸永その子幸昌その子幸信その子幸定
その子幸秀その子幸守その子幸則その子幸好その
子幸光その子幸持その子氏幸その子幸棟まで十六

代相傳して左衛門尉信濃守と云幸棟の子棟綱ハ即
幸義の父なり然るは貞保親王より幸隆まで三十八
代に當れり
天文七年左京大夫幸義・村上義清と小縣郡に戰ひける
に幸義討死して一族郎從・処々の散亂せしかば幸隆上
田に安堵せず碓日嶺を打越・上野國・群馬郡箕輪なる長
野信濃守業正の許に客人の體にて潜居けり是幸隆廿
六歳の時なり
世に眞田三代實記と云書ありて作者を詳にせず其説
に海野小太郎幸氏木曽義仲の嫡男志水冠者義高と
共に鎌倉へ人質として下向せしに義仲頼朝に遂ん

古女旅装

一遍上人繪ニ載たり
土佐將監筆ニて
鎌倉北條家の末
まくの風俗としるへし
清水冠着ものからか体ニて
みけしからん

苧垂衣は苧ニてつくる
唐の代の帷帽をうつせしものなり
別ニ考あり

尾張熱田宮再興乃繪
享祿二年二月吉日筆者加野
和泉・祐筆資信

今嘉永元年より三百廿年前の繪なり

下女の体
側づかへの女なるべし
主人の体

の聞えあるに依て範頼義経をして誅せらる義仲勇
ありと云共終に粟津ヶ原にて流矢の為に亡ひぬ其
嫡子たりしは志水冠者も誅せられき海野幸氏は無念
に思ひけれ共せんかた様なく是よりは武田清光の方に
かくれ居けるが清光海野が英雄を知りたれは客分として
差置けるが是縁に依て幸氏が子孫武田家に仕へて苗
字を真田と改め累代の長臣たりしと見ゆ是説信すへ
からず志水冠者は頼朝卿の婿たりと云共義仲の嫡
男なれは悪むへき非ず殊に大姫君の知食んをも恐れ
ましゝが故に竊に昵近の輩に仰含められしの所何に
志りたる姫君の御耳に入けん驚き思召義高をは婦人

の体に作りなして密に鎌倉を出し幸氏を義高の帳
内に臥しめ宿直の者を欺きたりしも遂に事顕はれ
義高誅せられき幸氏は禁固せられしかど強ちに幼稚
にして主の命に代る忠義を感じ玉ひ旧領を授けらる
武衛の家人に列せし東鑑に見ゆ旧領とは上野吾
妻郡三原庄信濃小県郡海野庄を云ふなり元暦元年四
月の事にして幸氏十三歳の時なり建仁元年城小太
郎資盛謀叛の時幸氏三十歳にて戦功を顕し承元四
年十月上野三原狩の事を言上しけるに時は左衛門尉
にて三十九歳なり嘉禎二年北條次郎時頼始て流鏑
馬射けるとき幸氏が馬の故實を語りて座中の射手

をまし先。泰時朝臣を感せし先。右大将頼朝卿の時天
下の人の射手たりし名を揚しハ六十七歳の時なり
其明年七月射術故實堪能なるをもて北条時頼朝臣
の師となり。仁治二年三月幸氏。武田伊豆入道光蓮と
上野三原にて。信濃長倉保の境の事を論せしより幸氏
の申状諧あまりて理運の沙汰を蒙りしなと云を東
鑑及ひ武田家の記に見えて是等の事實に就て見
るに幸氏武田清光の許に客たりしと云ハ。虚誕なるを
疑ふし因武田清光ハ武田太郎信義の父にて仁安三
年七月八日五十九歳にて卒せしと武田系譜に見ゆ仁
安三年戊子なれハ幸氏いまた生れす。武田伊豆入道光

蓮とハ。清光の子武田信義の家督。武田伊豆守信光の
事なり幸氏武田家に随従の恩あらは。何と未く領地の
境を論すへき。又海野を真田と改めしハ。幸隆上田を
去て真田村に蟄居せし時よりと云。然るに武田信昌
と。跡部信豊と合戦の時。真田次郎三郎幸義跡部を射
てこれを殺し此功によりて左京大夫と改め佐久郡岩
尾城を預られ曲淵庄左衛門か女を妻として禅正幸
隆を生しむと同書に記せり信昌跡部と合戦せしは
寛正六年にして武田信昌十四歳の時なり。跡部信豊
と云ハ上野介景家の事なり。甲州。西保。小田野城にて
切腹と甲斐國志に見ゆ。幸義の射落せしと云ハ誤なり

寛正六年より幸隆の生れし永正十年まで四十九年
なれバ、是より廿八年にして幸義討死せしとすれバ寛正
六年廿歳許とみて也。七十許にて幸隆生れ、九十八六
にて幸義討死と聞ゆ。年齢において疑ひ無し。剰真田の
名字幸義に起るにあらざれバにや。又幸隆の母曲淵庄
左衛門の女と云事大に怪しむ事無し。曲淵ハ初鳥谷とて
板垣信方の草履取なりしを武功に依て晴信朝臣の召
出し直参となし、板垣の同心とせし也。甲斐國の史楽
に詳に見ゆ。然るに時々鳥谷の曲淵となりしハ晴信朝
臣の代にして幸隆廿八九歳の頃なり。實に曲淵の孫
なりと云ハ、板垣の草履取の女をもつて幸義に嫁せ羅

まれと云へるか。學むと云へるか。岩尾城ハ大井彈正
忠行、文亀永正の頃まで拠領せし也。子曲の眞砂に見
ゆ。天文十三年十二月に内山、前山、岩尾等の城を落
降参せし也。武田三代記に見ゆ。幸義の岩尾に城代た
りしと徴とすべき無し
長野信濃守業正ハ伊豫守憲業の嫡子にて母ハ小幡三
河守重朝の女と云。又憲業ハ上杉民部大輔顕定始て上
州平井の城に住せし時より味方に属し顕定の養子上
杉四郎顕實、實子上杉兵部大輔憲房その子上杉憲政を
四代又十餘年無二の忠功をたてしかば上杉幕下に於て
長野の右に出る者のある無し。天文三年七月業正

父の家督を襲ふ時卅六歳なり。智謀勇略萬人に勝れ寛優
温恭諸國に接する術を得たまへば。關東の名將勇士一旦
上杉家の政道を疎み面々の在所に引籠り年来へ出仕
せざりし輩も業正一人を準的として非番當番の怠を
佗言申年始八朔の太刀馬を贈答し偏に管領家中興の
運を開かんこと遠からじと見えしに依て幸隆にも還く
と蓑輪まで行向ひ。其旗の手に従ひ。父の讎たる村上義
清を討て不共戴天の怨を晴さんと欲せし
一書に。武田信昌廿八歳にて逝去ありしかば。親類山
縣左衛門清之の計ひにて信昌の二男竹王丸を十二
歳にて元服させ信縄と名乗て家督相續させ此時真

田幸義の嫡子徳王丸を元服させ次郎三郎幸隆と名
乗けると見ゆ。今考るに武田信昌ハ。永正二年九月十六
日逝去年五十九永昌院殿傑山勝公大禪定門。甲斐國
万力筋落合の永昌院に葬ると甲斐國志に記せり然
れば廿八歳と一書にいふハ誤なり幸隆ハ。永正十年
の誕生なれば信昌とハ時代同しからず。又永正十六
年三月下旬加賀美次郎を武田信虎の滅さんが為に
小幡日浄。原大隅守小熊部に陣せし処へ真田次郎三
郎幸隆。二男海野次郎幸綱三百餘人にて来會ける由
云ども幸隆もわづか七歳なれば。將帥として血戦に堪
へからず

策に上杉憲政ハ累代関東管領の権と伊豆・上野・越後三
國の勢を恃頼し長野業正が匡救の誠をも思はず便
佞の小臣をのみ馳走せらるゝによりて何れも大身の
隊将相互に嫌疑ひ己々が領邑に溝塹を浚し樹牆を築
き割據の色を顕はして鄰國の憂を訪ふ遑なければなり
よりて幸隆の本意を打明かし援を請べき時を知らず只鬱々
として日を消すうち天文九年伊勢國司北畠中納言具
教卿の老臣長野右京亮親綱の許へ業正より使者を立
て物を饋ることの有けるが百餘里の行程を隔て然も四
方皆敵國なれバ事故なく伊勢に到り着んこと太だ難し然るに
このあたりの進物を運漕せんこと容易からじと蓑輪の諸
老臣額を集めて僉議しけるを聞て幸隆の使者として
伊勢へ行んことを望みけるは業正大に奇しみ多勢の人の
難と為ことを年若き御邊の望むことハ故ぞ有ら
め然ハとて我きみを疑ふの故に問ふにハ非ねども其概
を語られよと有し時幸隆答へてやう誠に仰せさまに
なく覚ゆ但殿を使者に為たらんにハ事故なく達りた
まふべきことを推量さるゝ両殿にも到り難く思ひ給
やと云業正何ぞ我ハ達着べく思ふ哉と云幸隆不肖
なれども共清和天皇の後胤に生れ弓馬を傳ふる身なれ
殿の術と色品ハ替れ共大様たることをハまし言におよ
ハ漏やせしとや志かは業正も文問をも致し幸隆ハ進

古男旅装

親鸞上人繪
浄賀筆
上人に従ひし旅僧の体なり
一遍上人繪にみえし旅あるき人なり
杖をたてて休む体
俵藤太繪にみえし旅人の体
従者うつぼを負たり

笠きたるは女房を具したるなり
馬にあるところをかけるなり
主人は弓もち馬にのりし体
宇治拾遺にみえし利仁将軍越前の家へ下向の如なとおもひ合すへし

物を請取家に歸りてのち旅行の用意ハせしが平常の如
く弓を射馬を馳あるひハ川狩なとして日を暮し斯く
廿日餘を過しゝ後幸隆何地へ行しや掻暗見えずなりしく
眞田が家人驚きさわぎしく限なし業正ぬしを聞と云共
只知ぬ顔にもなし時々指折て黙笑するのみ
長野系圖を按に在原業平朝臣十四代の孫に右兵衛
佐業家久明親王に扈従して関東に下向し伊勢國多
度郡長野庄三子町を給わりしより長野氏と称しの
ちに業家の孫長野左衛門尉業忠の嫡子長盛修
理亮業綱足利尊氏卿に近侍し後に基氏卿と共に鎌
倉に下り上野國群馬郡に千餘町を給わり箕輪に住

なり業正ハ業綱八代の裔にて業綱の弟長野右京亮廣
忠ハ伊勢國司北畠權大納言顯能卿に屬して伊勢國
に住せし親綱八代の祖なり
然に幸隆何なれば斯る振舞をなしけるやと聞に進物
を請取て直に心易き家子を伊勢太神宮の御師に装ひ
なし其荷物の内へ隠し武藏相摸の檀那に送らせて東
海道を上らせ又勇力ある家子に又人を六十六部回國
の修行者に扮へて外なる御師の援となし今ハはや
伊勢尾張に到着けらんと思ふなる我身は疾に混なく
碓氷嶺を打越木曽路を尾張の國へ出て立し時實に長
野の進物をハ唐櫃に入て幸隆夫に扮て荷擔してなり

是ハ長野乃家人等の内ニ幸隆か使節ニ立たるをそ嫉
と思ふ人ハ有へし。夫等か道を遮りて。如何なるわさをか
為たらんも莫らくに煩ハしからん。是を避ん為ニ御師
六部をハ装ひ出しなり。又我家子とらくハ。打任せてハ嫉
かくし。其ハ實の物をは我身ニ副たりしなり。家名乃
渡なく御師。六部と集會されよリ手連て長野か館へ行
向ひ。思ふ使ニ為課て東海道を駿河まて下り。山本勘助
晴幸ニ面會し。我身乃沉淪せし由を語りしは。晴幸。村
上ニ亡し本領を取返さへき策を論ひ。幸隆止りて其策
を聞まく思ひ出る共人乃為ニ使して私ニ止留へきに非
らく只一面ニして別れて上州へ立歸る
記ニ見ゆ　長野家舊

山本晴幸乃傳既ニ成て後二傳を得たり。其一ハ駿河
冨士郡山本村宗持禅院ニ傳ふる処なり。其説ニ鎮守
府將軍源満政乃裔ニ木田太郎重季義久合戦乃時京
方ニ条りたりけるか罪科ニ依て誅せられし。其子孫
駿河國に潜居て吉野某といふ冨士郡山本村ニ住て
八幡宮乃祝戸となり吉野浄雲入道と云入道乃二男
彈正貞久今川家ニ仕へて山本と名乘所領ハ山本の
内。三沢。衣宮。三刄賀茂乃内合三百貫文曽の前立ニハ
幡乃神號を彫家乃紋も三巴なり文明十年七月十二
日参州ニ戦死以法名を鐵関直入と云貞久乃男圖書
某乃ちニ彈正と云妻ハ庵原安房守乃女。男子數人あ

次男源助貞幸十二歳にして三州牛窪牧野右馬允の
家令大林勘左衛門が養子となり勘助と改め廿歳の
時大林の家を出諸州偏歴すること三十餘年又十二歳
の歳武田家に仕へ諱字を賜ふて晴幸と改め永禄四
年川中島にて戦死す鐵岩道一禅定門と云ふと云ふ説の
如くハ永正元年牛窪に生同九年牛窪を去ると聞ゆ然
らハ晴幸が牛窪に住せしを晴信朝臣未生以前の事
なり晴信朝臣十四歳の時晴幸を牛窪に訪ひしと
小山田板垣の家譜に記せしと合ざるハ疑ふべし其二
ハ近江源氏山本遠江守武定七代の孫山本藤文郎武
貫に二人の男子あり一を山本圖書武了と云ふ二を勘

助晴幸と云ふ武田家に仕ふ武了ハ越前朝倉義景に仕
へ武了の子傳兵衛武清加賀に仕へ百人扶持を受し
と云ふ武清の子三郎兵衛武頼の子に熊谷安左衛門と
云ふ江戸浅草本法寺熊谷稲荷の本願人なり系圖本法
寺に傳ふと也又北越軍談に晴幸父を勘右衛門と云ふ
牧野新次郎成定の被管なり伯父山本帯刀左衛門成
氏に兵法を学び後に寺部の鈴木日向守重辰に従ひ
兵法の奥秘を傳へたりとも云ふ其傳記一定せず猶
考へし然共天文九年晴幸四十八歳駿河にありて真
田幸隆に會しこれハ結縁としく疑ふべきに非ず
幸隆蓑輪に歸り伊勢の長野の旨趣を報せしかば諸老

臣下を振く其器量を賞歎し若齢同士ハ側目て其功労
を媢嫉ミの心多かりしかのは結句業正も終にハ意を置
やうに見えしが憂悒かりけるに人情振り斯くハ変にも
安く身を安く措難からんにハ鬼や為まし角や計らんと
思惟処へ従歳駿河より一面謁ひけるに山本勘助の使あ
りて何事やらんと思ひつゝ呼入れて子細を問ふに山本今ハ武
田晴信朝臣の招きに応じて甲斐の国にありて晴信朝臣の
胸襟を推量るに近く兵を発し信州の諏訪方小笠原村上等
を斃し其地を并せんと欲る如し若實ニ然らんにハ幸
隆父の仇を復し本領に入部せんにハ時遠からじ覚えハ
一旦当国へ御越ありハやと謀演りたるに幸隆ハ内々は

立退んやと思惟るに折節なれば隠密に返答しつゝ彼使
の使者ハ返し一日二日過て後所労なりとて出仕
を止て引籠りて我家人にも容易く対面せず業正此
由を聞使を立て言せけるハ幸隆の疾病尋常の医薬の
治すべき非ず当国甘楽郡の奥余地の峠を打越て良
薬を求むべき所ある今日明日の内に思立ちへしとて馬兵
多く引立たるに幸隆大に驚きけるが然ぬ躰にもて成し
御志の程ハ如何にも等なくも存ずれど共所労ハ外の
大事なく莫くも思立へらも覚えずと答る共業正御
所労大事のやうに承りぬれバとも療治の為に一ハも
早く方を施せと催しけるは幸隆も此上ハ迚

結鞍古圖　天文年間繪

倭名類聚鈔に
唐鞍　移鞍　和鞍
結鞍の四品を載
からくらは唐装束に
うかふる御物なるへく
うつしくらおよひ和鞍
は日本装束なり
結鞍は荷を
結ふるくらなり

三百年余の
今も旅荷のさまの
おもしろきを
見へし

友人武清藏本なり

其曉出立一宮を遥拝し徑に船く下仁田に至る所
馬共多く荷を負せて出立るを見れは皆真田の家具に
其跡より真田の妻や家僮なと有かるを引連れて来る
を何かる斯ハと怪めは左衛門殿の立出たる跡に續き長野
の老一二人来く業正の課により如斯出立せ武文ハ追
及ひ来り所ふく殿より進らせひへと申て渡しける文を云
文袋より出し文取出して幸隆に渡し幸隆披き見れハ甲斐
の婿信朝兵ありて義き人に文有けるを弓取なれ但芸論
に業正ハ有ん限りハ左右なく碓氷川を越て馬に草飼
んと思ひぬへきか連り本領に歸へるもなく講変を忘
却なしき事なと細々と書けたり幸隆も業正の心中

慚かしく如斯有んと兼て知けらは打覗て譚入んを
包しにても難面をして馬を停めて暫時をすめりけ然れ
引返し更に不有りは信濃國佐久郡に打入海尻平澤
を經て甲斐國巨摩郡柳澤に着れ山本晴幸が家僮迎の
為に出来り行會ぬ共に喜ひ言交し前途を急けれ其
夜は本か宿所に到り翌晨夜明て晴信朝臣に角と申せは
軈て對面ありて宜ひけるは御邊の先祖小太郎殿と某
か曩祖伊豆前司信光と鎌倉殿の幕下にて親しく申通
しひて舊記に詳か記されしかは更に疎意を存せ仍海
野の領氏三原庄と當家の氏と境續てひけるに地は東
鑑に志されたりと雖らは今村上義清の押て所務をなし佐

久・小縣の二郡ハ海野と武田の舊領なりけれバ晴信ハ
佐久郡をぞ受べし御邊ハ小縣郡を御本意あれと宥し
かば幸隆大に悦び信州へ立歸るべき支度のため爰彼
に潜み居ける海野譜代の兵士を招きけるに何しろに
方に聞えし禰津望月會田塔原田澤借屋原岩下等の一
族をはじめ我も〱と馳集りけれは程なく三百餘人に
成りけり
晴信朝臣着到に眞田二百五十騎海野八十騎會田十
騎矢澤十六騎塔原廿騎禰津三十騎望月六十騎と見
ゆれは滋野の一門に百六十騎と知らる一騎又人と
積りて二千三百三十人の軍賦と定らる爰に三百餘人

と云て一騎兵士を催ふなへし
其頃佐久郡内山には大井小次郎隆景岩尾には大井彈正
忠行平原には平原右馬助入道全眞芦田には芦田備
前守信常村上方にありしハ武田一味と云にありしハ
己々の一分を守るべく只堀を深くし塀を修め籠り居け
るを幸隆竊に語合けれは一議にも及ばず皆武田家へ
與力合体の誓書を贈りて佐久郡の大概定まりぬ然るに
小田井又六郎同次郎左衛門兄弟幸隆の諜説に應ぜ
ず結句兵糧を用意し玉藥を調錬をなし聞えしかは天
文十三年十二月十日尾臺の城へ武田家の軍兵八千
餘人にて押寄たりき抑も尾臺の城と云は碓井峠の西

軽石和より平尾岩村田への通路に室通ふもの追分と大井の古城との中央なり要害の地にもあれバ後援の頼にありしに又六郎兄弟よく軍して次郎左衛門ハ小幡孫次郎に討れ又六郎ハ曲渕勝左衛門に突伏られ従卒ハ思々に討死し城終に落たりしかバ佐久郡ハ平均に治まりぬ晴信朝臣是全く真田が勲功なりとて大に賞を行なされ岩尾の城主に替なされ後に幸隆上田を落く七年流浪して初て一城の主に成りけるを山本晴幸が秘計によつて晴信朝臣の深恩なりと肝に銘し骨に刻むべく悦合是より無二の味方となり篤くなりし是歳幸隆卅二歳なり

山本晴幸の真田幸隆を挙て佐久小県の地を定めしハ秦の滅んとせし時項氏楚を復へ田氏斉の地を畧せし故智を倣しと聞も幸隆は亦武田の力を以て父の讎を復し旧領に還ることを得ば武田家の偏裨と一列に此面の臣たらん者ぞと断せられしの如し

幸隆岩尾に在城して武田家の為に小県埴科高井筑摩川東を定め遂に川西の諸郡を蚕食せんと謀を示せしかば小県郡室賀の山城守信俊入道一葉軒・其子の三右衛門尉・矢沢の但馬守頼綱・根津の美濃守信直武石の大井竹葉軒山棟・小泉の内匠助宗貞等よ申合し語合のなかま武田晴信の軍に与し又信虎とは事替り賞を重くし罰

を緩くし士を貴び衆を愛するが故に軍士八千餘人ハ
慗の如しと云共戰ふ臨て死を致し力を竭す兵士ハ十
萬ふも敵ふ後し然らハ村上ハ終ふハ打負へし歸去や
我ゝも武田家と合体して身ゝ乃安穏を計らんと存る
ハ如何あらんと云は何ふ誰ふ斯ハ思ふとなれと忽
ふ一味同心して頻ふ真田か代官を告しかは真田忠よく
を承て思立しハ神妙乃御計策やと色代して急ぎく家ゝ乃
人質を幸隆請ふて天文十四年正月何も甲府へ参向し
て晴信朝臣ハ對面乃禮を遂たまひ先・尾臺合戰の後
干戈を動さず志て小縣乃諸城主味方ふ屬せしハ真田
が計畧ふ依處なりとて甲府乃君臣是を喜びたり

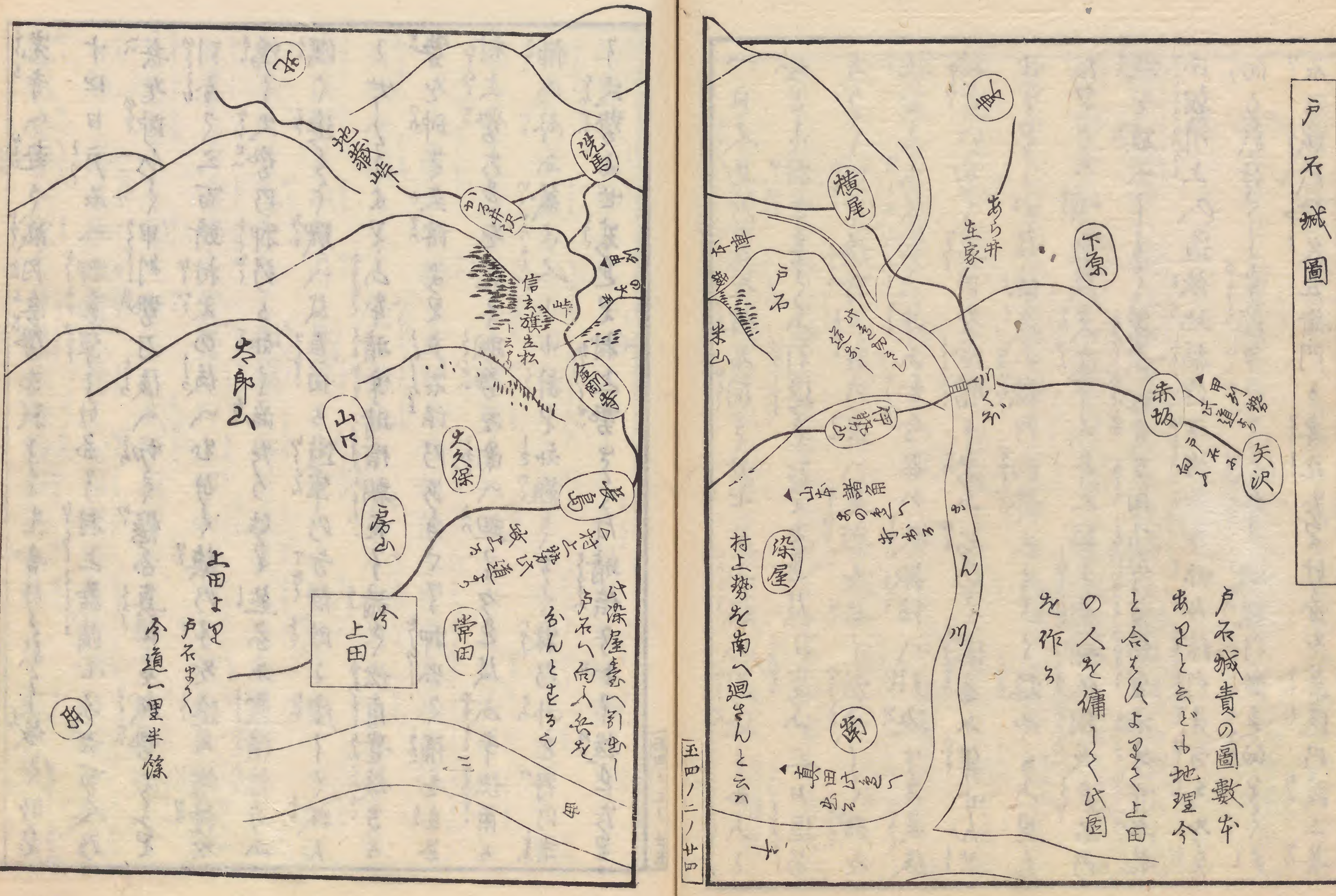
室賀廿騎・望月卅騎・矢澤十五騎・祢津卅騎・武石卅騎・小
泉廿騎と甲陽軍鑑に見ゆ・室賀ハ小縣郡乃西北ふ在て
筑摩郡青柳麻績更級郡姨捨山ふ隣ふ其細を室賀二
郎盛快と云多田満仲乃弟下野守満快六代乃孫なり
丸子ハ小縣郡乃東ふして佐久郡へ郡境田井ふ壌ふ
或ハ圓子・鞠子ふ作る家三右衛門尉優よ民部少輔と云
馬鳴美濃守乃聟となり駿州清水乃城代となる家懐田
乃支族なり矢澤ハ小縣郡乃北真田乃南ふあり海野
の一門なり頼綱ハ幸隆乃弟なり共ふ人・祢津ハ矢澤
乃東ふ續く美濃守信直ハ左衛門尉道直十九代孫と
云後入道して松鷗軒常安と号ス武石ハ丸子乃南ふ

志く和田嶺ヲ越へし大井竹葉軒翁ハ大和守信廣の
孫なり信廣乃父を安作守光照と云小泉ハ室賀の東
筑摩川を隔て上田ゟ隣る村上乃支流の源氏なり
又同十二日晴信朝臣甲府を進發ありて十八日小室ニ
着せ玉ふ由聞えしかは幸隆ハ岩尾より・飯冨兵部少輔
虎昌ハ内山より参會し相木市兵衛正朝 後ニハ道常喜と云 芦田
下野守信守望月甚八郎重氏前山伴野平原等の諸
士を小室ニ會せし由晴信朝臣對面ありて太刀腰指乃
刀馬疋なと其程ゝゟ從ひ引出ものハ新参乃諸士其應
對乃懇切なるを感し幸隆ゟ勸誘乃處しかるへきなを
語り續て説ひ伝へ其程ニ一郷一村の一騎合乃士まで

幸隆を慕ひ・如何にもして眞田ニ親しミよりて晴信朝臣の
御目ニ懸らはやと思はぬ者もなかりし・同じく十九日
午刻諏訪高島乃城代板垣信方乃飛脚來りて木曾伊奈乃
諸士小笠原と一味して潮後峠へ打出る由を注進を以晴
信朝臣ハ此注進を聞や否や佐久小縣乃仕置をは眞田飯冨
乃二人ニ任せ即日潮後へ發向あり
世ニ眞田幸隆岩尾ニ住せし頃山本勘助尋ねて兵を
論せし一節を記せし書あれど僞説信ずへからず・其説
ニ勘助廿二歳今川義元ニ見えて聞ひらき以九年の
後天文八年岩尾ニ至て眞田ニ見ゆと云り勘助廿二
歳ハ永正十一年ニして今川義元誕生乃永正十六年ニ

五年先たち天文八年にハ真田蓑輪に往ていまた岩
尾に住せし是等時代の相違せれバなくも統の誤を知
るべし
村上義清ハ晴信朝臣小笠原長時と越後峠に戦ふと聞
能間なりと思ひ小縣郡へ打て出れ真田を苐くも思ひ設
たりしを此遣は奥彼の山々峯々に遠篝を夜々焼せしが
は甲斐勢の佐久小縣へ後援と見れ如く見えて騒し義清
ハ不意を討んと計りしに敵よ斯なの用備あるくハ味
方の利党束なしと思ひしにや人数を早く引上なりし強
敵り飯富兵部少輔ふ使者瀬鹿峠に至り此事を告たれ
ばよて晴信朝臣桔梗原の軍を棄まて諏訪へ帰陣有し

一日人馬の足を休め同き廿七日小縣へ引返しまふしと
云とも村上きくに引退きたりけれバ小室に三日逗留
ありて田中海野戸石の邊へ足軽を出し放火して銭を
挑まく云共村上更に物合ね八丈諏訪へ引返せる是後
村上いよいよ真田を心憎き者に思ひて容易に軍せん共
せざりしかバ佐久小縣の両郡先しらく穏やかに見えし
たりなりの悪逆は天文十七年三月上旬晴信朝臣戸石の
城を攻へしとて栗原詮冬芦田下野守信守相木市兵衛
正朝川上入道依地福沢平次等を始め信州先方の者を先
向られけくし幸隆は夜に入て忍しく間諜の者是敵なく戸
石の城代津久左衛門の妻死たりけれバ是を葬送の為に善


戸石城圖
戸石城責の圖數本あれと云ども地理今と合さるはよろしく上田の人を傭ふて此図を作る
東
横尾
あら井
生家
下原
戸石
米山
伊勢山
赤坂
矢沢
染屋
村上勢を南へ廻さんと云ハ
南
ちくま川
北
地蔵峠
洗馬
信玄旗立松
長島
村上勢此道より攻上る
太郎山
山下
大久保
房山
常田
今上田
公染屋表へ打出し戸石へ向ふ人数をなんとをろん
上田より戸石まで今道一里半餘
西

光寺へ赴き城内無勢なれバしかと告けれバ依て能も
十二日戸石へ押寄軍しけるが村上義清七千六百人の
兵を師ゐて甲州勢の後へ切て懸る真田が鉄勢たりしを
引分て三百騎村上の後へむけて旗の手を進め螺鐘を
鳴し大勢の押行が如く為たりけれバ然るに義清餘りに
深く進みて戦へば真田が遊軍の方便既に虚して戦ん
とせしかバ山本晴幸晴信朝臣に請て諸角豊後守が
勢を師ゐて矢除より戸石城の方へ押出て備を立る
村上勢出しを見て胴勢を南へ廻してしは山本諸角が
備の外に幾千人とも計り知難き林の外也野の末
に大勢よせ来しバ村上勢さらば晴信が出て抜出たり

的勢に取切ぬれバ叶ずして六具の兵士機を奪れ也
惘然たる處へ小山田備中守加藤駿河守急に進みて戦
ひしかども其身悉く勝軍とハ成しかり・然共甲州方に
て一人當千と聞えけるが甘利備前守虎泰・横田備中守
高松を始として歴々討死し士卒千人許死亡しけるは
晴信朝臣以の外に愁傷し御座よし・誰云と無く風聞ス
此事終に隠れもなく武蔵上野の風説區々なりしかは・上
杉幕下の諸将倉賀野・見田・上田・和田・山上・深谷・後閑・長根
等集會して聞が如くんは武田家の滅亡近き時節到来と
云廻し帰去・佐久郡へ打て出・信州の武田持の城々を攻
落し其勢に依て甲州へ押掛来神子筋よりも乱入へハ何

獰猛く働くとも甲州武士の敗走せんこと鏡にかけて見
べし甲府を打落しなば諏方の板垣内山の飯富
小諸の小山田備中なとは誅するに易かるべしと議したれ
されば何れも皆此評定に一決して逆打立んとせし所に
蓑輪の長野信濃守業正ひとり是を拒みて申けるは能く上杉
家の宗家は末々なりといへども甲斐の晴信今年廿六歳
と聞く武略に長じ常に士卒を操練して聊も未練の所も
なし先に大將の甘利討死すと云共其隊長米倉丹後守
踏止りて其場をさらず合戦を持懸たんなど旅ら山本勘
助とて諸國を経歴して名將勇士の道を飽まで聞集た
る曲者を近頃招きて扶持し且晴信は日夜に鍛錬すとかや

他國に打出るとも戸石なんどの振舞を見るに及ばし累代
洞練の村上に一事に勝けるに討果さで怯き負軍せしと聞
是とても武勇の勝劣のみにはあらで全く兵法の奇計に出
たるが故に此邊へ漂泊せし浪人等は臆病者共にて
戸石の軍場を悪く仕て腰抜様に拂出されし者なるべし
されば某が許に暫時寄食して居る真田弾正も同
を計らん為に関係を立かけて浪人を當國へ入込せ
たるならんに遠く其謀に陥りて玉ふな業正は
更に同心仕らずと申も其實は思ふ人はなくて結句
長野なくば軍なるまじいぞ逆打立と云程に倉賀野
六郎を大將として同淡路守見田太郎左衛門尉上田又

次郎・松本兵部丞吉久・和田左衛門尉業繁・同兵庫允宗勝
等相聚りて都合二万三千余人天文十七年九月下旬・甲州
へ攻入んとし・碓氷嶺乃あなたなる・坂本・松井田乃陣をとる
其勢幾万と云事を・計り知へかりしと云て旗幟の
標を閃し武蔵上野乃兵共は・大旆打立たりと聞えて鳴
呼騒しと信州路へも聞えけり・内山・小室乃城々へ告く
まり防戦の用意をなし・早馬を甲府へ立て事の由を注
進す晴信朝臣・此程瘧病にて病床に在てける左馬助
信繁に穴山伊豆守信良及び足軽大将廿人を副て・諏方
乃番手を指向られ・板垣信方を呼返し・上州勢乃討手の
大将と為し相従ふ面々は・栗原左兵衛尉詮冬・日向大和

守是吉・小山田左兵衛尉信茂・小宮山内膳正昌友・逸見勝
沼・小曽・南部・信州先方乃芦田下野守信守・相木市兵衛正
朝等乃勢合せて七千余人・十月四日に甲府を立・打ちに打
て押程に同六日乃巳刻に信州佐久郡軽井澤に馳付く
段々乃次第を定て列を引・上州勢乃先手又千余人上田
又次郎・見田又郎左衛門・碓氷峠乃東坂・列石乃邊にありて押
詰後陣の勢を待處へ板垣先陣に進んて峠を打越散々
に切崩せば・上田が先備藤田丹後守ハ廣瀬郷左衛門に
討れ・師岡隼人ハ仁科肥前守に討れ・白倉弥太郎ハ上野
豊後守に討れて先鋒忽に敗走し甲軍此るを追て首を
獲ること一千二百十九級と挙・板垣一戦に討勝・其日午刻に

勝間乃法式を難行ふ。爰に真田弾正幸隆ハ、夜間乃妙術
を得たる武名上野乃諸将を碓氷嶺ハ、備引出し嚢中の物
を探るよりも猶安くと大勢を切縻しびき共長野信濃
守業正ら寄るさふ主を心悪く思ひハ窺ふ甲府へ飛脚を
参らせ武蔵上野乃者共北條氏康に助立られ城を落さ
れ陣を破られしを幾度と云ことを知ず。武田家との弓箭
乃今度を初めならず大将乃御旗を向けられなバ遺恨
にハあらじと申せしかバ晴信朝臣何とて捨置くべき。上杉被官乃者
乃批判も後悔し病苦乃為に鉄炮の玉をおそれず旗を
治の鼓に臆病乃者ハ取りて打や者ども進めや者ども勇ま
せて馬を出しまへバ甘利左衛門昌忠・馬場民部少輔信春

淺利式部丞信音・秋山伯耆守晴近・原加賀守昌俊・内藤修
理亮昌豊・諸角豊後守昌清等を先として足軽大将にハ
小幡織部正虎盛・原美濃守虎胤・山本勘助晴幸・曽根七郎
左衛門・安間三右衛門等なり。其勢凡そ五百餘人甲府を
立て碓氷にかゝる。志賀乃笠原新三郎上杉勢と一つに成て
晴信朝臣乃御馬を支んとや手勢を以て打出て大兄晴信
朝臣是を見て悪い笠原が振舞かな誰かある。あれ駆向
て蹴散せよと下知しまへバ春日源五郎承りてと一文
字に突かゝりけれバ笠原叶はじと引退くを追討に打く
刹那も路次乃逗留せず軽井沢に着陣ありし上州方にハ
板鼻に先陣ハ切貫しかども後陣ハ嶮しき坂路に碍ら

ま軍場をも見ざりし者共今一度有無の一戦をと思儲
けたる時なれば晴信朝臣の着陣を聞や否六万六千余人
二の合戦を待ずして碓氷峠へ押上る甲州勢は飯富虎昌を
先陣となし熊野権現の表の中より名を得し鉄炮の上
手共を勝すぐりて打せけるにかゝる武者の鎧の毛付てし的
を打よりも心安く打落せば上州勢仁王の崖に扇を伏て
進みし虎昌是を見さめし鑓を入よと云もまたぬに飯
富が与力三百余人一文字せ以て撞とおめいて突かゝる
倉賀野六郎真先に進て昨日の臆病者と一様に思ふ入
なよと声を揚て打合ける処へ武田重代花菱の紋の旗
嶺へ颯と差揚たり是は晴信朝臣旗本を以て二陣に

續きたりと見る程に飯富が備も大将の跡を詰らるく
に一足も引たらんには末代までの瑕瑾なり死ね兵と互
に勇み勇らて輪宝の巌を砕く勢ひ屑ならぬ殺気整々
と敵の陣へ覆ひ掛りたれば倉賀野六郎終に敗軍して
まだ備へし後閑山上一丈も支へ坂本さして引返せ
ば武蔵上野の兵士等武田勢の旗の手たゞ見さ赴て裏
崩に崩れ立主を捨親を顧ずして我先にと己々が生所へ逃
帰る甲州勢は坂を下りて追撃して未の下刻より酉の
刻の終りまで敵を打こと二百六人とかや晴信朝臣
其夜首帳披見ありて勝鬨を揚られ其式披垣の数々
ひし體を様替り威儀厳重に役々の所務丁寧なりしか

ハ初板垣の美々しく見へしハ僞ならん大將軽井澤に
三日逗留ありしかバ分捕の兵糧を盡し板垣をハ今暫
上州勢の景氣を見よとて留め置同十日に凱陣ありて
蓋幸隆信州の諸士を間して村上方の羽翮を殺ぎ佐久小
縣の諸城主を降し其功を以て舊領を復し又上杉幕下
の諸士を間して由也を碓氷嶺に破り長野信濃守を疑
はしめ晴信朝臣を激して板垣が短慮にして自専なるを救
はんが爲に凱歌の式を挙しハ信方の徳を顯し親を篤
うせんが根株といへし但其謀略深遠にして人其影響を知
ことの能ず獨長野業正あつく是を察知し其術中に陥る
に及ざりしハ是又材に長短測るへからざる所有か故なり

眞田幸隆ハ碓氷嶺の謀畧を爲任せて晴信朝臣の暇を
請岩尾城に歸りて熟々と合戰の様を案じ甲州勢の剛臆
よりて備配の作まで納得し再度村上義清を責るを便き
策を思得し同年十一月三日幸隆が居城へ板垣駿河守
信方飯冨兵部少輔虎昌小山田備中守昌辰三人を招請
して饗應種々の上幸隆申ようハ飯冨殿ハ内山ハ小山田
殿ハ小室に在城なれバ時々參會もせざれバ其心底をも大
形ハ知食べし板垣殿にハ親しく見參せしこともなく候ゆゑに
碓氷嶺合勝の後ハ屢對面給はりて殊に多年の交遊よりも
心易く覺て去秋より候なり其上親く某が思慮せしことを隱
さんやうにと存候此須間出して以る村上義清越後國へ使を

立て長尾と和睦し越後勢を引出し両旗を以て小縣佐
久二郡を切廻し終りハ甲州まて乱入んと申通し候
由．たゞし村上の所領越後の國．頸城魚沼二郡に散在し
て三四十箇處也．有けるに候．是ハ村上累代の本領なりと
承なる然るを近来長尾に押領せられ候により義清
と長尾と多年矛盾して弓箭を取合候へとも．佐久小
縣の二郡ハ．眼前の恥辱なりと思ふか故に是に変易して
和睦せんとを討なるへし長尾ハ一類多き者也．若義清
と一味同心せは由々敷大事ならんて幸隆一策仕り候
ちつやを存候へとも．何れも村上押の為に御在城なく候
間さし扣て候と云．信方聞て真田殿の良策兼て承たり

及ひて候．定めて神妙不測なるへき所也若．少その略を
承らまく後学に仕らんやと云．幸隆答て左候．小を以て
大を破り寡を以て衆に克候ハ．軍法の秘にて其用捨の
際毫髪を論しかたく候．衆ハ．御存の上に候へとも中に及
て候傳承る武田の御家にハ飯田河原合戦と申ての候は
是ハ荻原常陸介昌勝六十歳許の時にて在所信虎朝臣
廿七八歳の時と聞．代時常陸介の會圖の小旗と云物を作
り二千餘の勢にて敵ハ．福島上総介駿遠に名を得し勇
士．然も一萬餘の勢を以て寄来りしを．只一時に攻破り
て候と承及．會圖の小旗とや申ハ．奇兵の術にて即武略と
申者に候．奇と申せは偶の反にて復ひ為かたき事を申

なれハ、ハ豫め斷るとハ、中難きかと云へ、飯富兵部が云
其荻原ハ某が娘また、十二年以前九月十三日に、没故
ましくて文形ならぬ、武邉韜畧の者なくしき會圖の小旗
のをハ象りし傳たるなどなく習ひ得しをしたる眞田殿
なる御相傳して聞えし能次に學ひしたんて御指南頼
みと云幸隆然御同栖とも不存むさと致したるを中途
赤面の至り、愚意の及よ程も方便を廻らし、無きぬると
浪人數刻の後、三將何も退散し、弥幸隆の胸中を憑もし
き者に思ひけり
眞田幸隆會圖の小旗の傳書一巻あり、其文長くしるく
爰に登載に勝ひ、僅に其畧を左に鈔撮し、一の先手七

組、二の先手七組、脇備六組、旗本六組、後備三組、遊兵又
組、小荷駄二備、總じて七組、以て北斗の七星に象り建除
満・平・定・執・破・危・成・收・開・閉の七字を以て懸引の會圖と
なせしと云り、是荻原常陸介より眞田幸隆に傳たりし幸
隆より眞田安房守昌幸に傳へ、昌幸より真田左衛
門佐幸村に傳ふ、幸村これを大坂に用ひ七組の手結
を成しと聞り
海野譜代の郎等職に須野原若狹守同舎弟總左衛門と
云兄弟の者あり、武勇等倫に超才智尋常に勝れけるが
幸隆も股肱耳目の如く頼み、機密を申含て埴科郡葛尾
へ遣し、村上義清に云せけるハ、我等兄弟ハ海野代

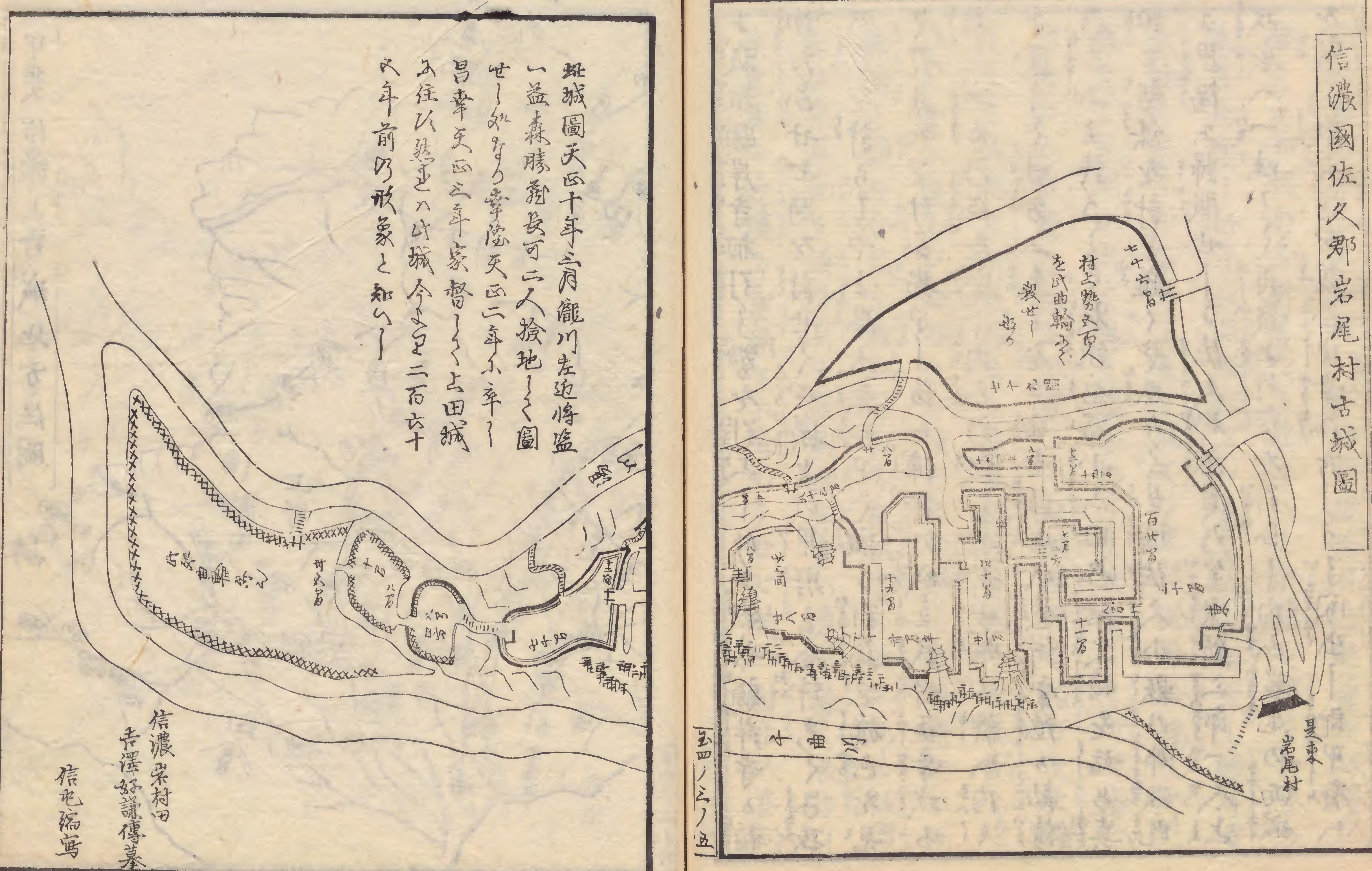
代家老なる者なれバ幸隆更に芳心なく岩尾に歸り
住し本領知聊かなくとも安堵せしよしハ舊臣等にもしらせ
所領を分配せんとに其事なく結句誤なき身を改易せ
られて仕へたりしか坐屠殺せられんとハ口惜く御影
を頼みて来りしと云入しかバ義清急ぎ對面しく面々を
海野乃柱石と称へし舊家なるに立退し様ぞ心得
ぬ是ハ義清乃寝首掻んとの謀なるへしと云兄弟の
者答けるハ莫々左様乃事ハあらじと誓言なしてせし時
義清然ハ真田乃居城岩尾へ我人數を引入いへ本意の
如く岩尾を乗取なハ本領乃一倍乃加増有へしと熊班
午王に起請文書く取交し薬師寺右近を清二清野六郎

次郎を始め究竟乃勇士五百人勝まおして兄弟に付く
岩尾城乃我趣りしむ須坂兄弟ハ村上を方便をまし
五百人乃勇士と共に岩尾乃里に至り竊に城中へ斯と
通しけれバ幸隆下知なく二曲輪へ引入たり五百人乃
者共ハ不知案内乃ことなるハ故に計策とハ夢にも知ら
バ須野原兄弟に誘引をれて進行に三曲輪乃塀の
上より鐵炮五六十挺連發に發しけれバ村上勢方便き
にかかりと始て覚れとも為方なく一處に集り的に成て
撃れ乃應く名字乃知し限を擇び出し首を甲府に
送りしかバ晴信朝臣能ゆせしとて感状を出されけり
爾後幸隆上田筋乃北時田山乃東乃𡶶連なる顯岸寺右

馬助雅方・布下新左衛門尉雅朝・依田右近進等を攻落し
互ひに如何なる計略をか為まし と肝膽を摧きけるに
急度思案しけるは板垣信方ハ勇ありて謀少し顎岸寺
氣猛くして少智あり是と鬪ふ時は両雄必傷くへし
我まつ其間に就く為をなすへしと決定して即甲府へ
此三人の形勢を注進して果して板垣駿河守信方を大将
として浅利式部丞信音と原美濃守虎胤とを差副られ
けれは案に違ずして板垣か作候の六十騎と顎岸寺の二百
餘騎と鑓を合せて戦ひけるか板垣勢ハ馬上なる従者
なけれは面て得道具の事瀬・顎岸寺ハ逸りて逸く長追し
原虎胤か逆備の突崩され念なう廿七騎ハ討死し其間

に板垣・顎岸寺相引して勢を引上しけり然共顎岸寺か頼
切たるに廿七騎を討せて心楽まず甲府と合体して子孫
の栄を計らんやと思ふ意起りて城に引籠り旗色を見
て居たりけるに斯りし後ち浦野の城主民部丞幸次も
村上興力の志を變じ内山の飯富兵部少輔か許へ内々
申通じて味方に参る由を断を注進して是従幸隆か勸誘
の力によりて板垣・飯富・小山田の諸大将を始め真
田の智謀を計り難くまて思ひける是時佐久小縣の郡縣既
に甲陽に帰服せしに佐久郡志賀の笠原新三郎一人上
杉家へ一味して再度上杉勢を引出し内山岩尾の両城
を襲ひ取んことを謀るに依て幸隆たゞちに聞出し即甲府へ

信濃國佐久郡岩尾村古城圖



此城圖天正十年三月瀧川左近將監一益森勝蔵長可二人検地して圖せしものなり幸隆天正二年卒し昌幸天正三年家督して上田城に住ひ然るに此城今より二百六十又年前乃形象と知へし

信濃栄村田
吉澤好謙傳摹
信也縮寫

甲斐信濃上野城地方位圖

注進に晴信朝臣きこしめし即然に打立兵をひきつれ天文十六年
八月二日辰上刻甲府を発し同六日笠原新三郎昌朝の
信州佐久郡志賀城へ押寄同十一日未刻に城を攻落し
笠原が首をば荻原弥右衛門これを討取晴信朝臣年来
の遺恨を晴し凱陣あるべきを催させける処へ幸隆申
されて此序に小室内山へ御馬を寄られ頃日新参の諸
士に対面給ひ又砂原峠通り上田原を御一覧ありて村
上方の城持とはいへ膽を寒し弥味方に志を運ぶ者多く
成ぬべし且又義清の動静をも探らせ給ひ戦をもせずして人数
勝術を旋させ給ふべしかと勧しかば尤宜しかるべしとて
を押出させ給ひ孫子が百戦百勝は善の善なるに非ず戦はず

ずして人の兵を屈するは善の善なる者なりと云に協へ
るが果して村上義清晴信朝臣の上田原へ打出玉ふと聞て
を関頃日当家被官の諸士真田幸隆に調略せられて甲
州へ味方せんと企るは風聞せしかども然のみ心とも
有ざりしに油断して打捨置しこそ浦野顎岸寺
なども定めて打出しならん今度晴信不敵の我
領知近く打出しは能き義清が見侮りし故なるべし是は
真田めが下墨なり有べき事は義清一人身をもつても晴
信が旗本へ切入て晴信と自身の勝負を決し多年の憤
を散ぜん左なくば幸隆が首を斬て又百人の若者の
冥福を備へられ此二つをもつて十死一生の軍せんと思

定めたる命をしと思さん人々は残り留まるべし此由根
津思ひしと牙を齧て躍り上り怒けるは小沼川舎人
助を始め重代の家人等七千餘人葛尾城を首途し榊の
道より推出し筑摩川を渉り上田原へ駈向ふ晴信朝臣は
是を聞玉ひ然ハ手合をせよやとて先板垣信方を先鋒
となし相備とも三千五百餘騎を六備に分ち二陣には
飯富兵部少輔虎昌・小山田備中守・同左兵衛尉・武田左馬
助信繁是も同しく六備に立たり其次に旗本六備左右
の脇備・後備には馬場・内藤を出し引下りて原加賀守三
百餘騎を扇の手に開いて備たり両陣互に弓鉄砲を以
て迫合けるか頓て板垣か手より曲淵勝左衛門・三

科肥前守・廣瀬郷左衛門なと一番に鎗を入て突立けれは
村上の陣よりも原田十郎左衛門・八木宗七・松野一齋・馳合
て火花を散して戦ふと云共皆一処に討れけり曲淵
三科・廣瀬奮ひ戦ひて手を摧きけれは甲州勢潮の湧如
く競掛りけるに村上勢を切崩さを義清か旗く思備しをよ
ともちとも騒かは二百餘騎の兵士を左右に立晴信朝
臣の旗本へ無二無三に切て掛り晴信朝臣と組んと血
眼に成て躍り懸けれハ窪田助之丞義清の乗たる馬の平
首を丁と突馬ハ突れて屏風を倒すか如くに伏たりけれは義
清たまらす百と落鼻より鮮血流れけれは眼眩きて今
ハ斯と見し処へ村上勢十四五騎駈来り義清を馬に介

乗せ中に引包んて引退く。幸隆これを見て足軽に村上
の馬印を持せて五人七人づゝ四方へ走らせ森の茂き
林の陰に立せたり。是は村上勢の敗軍を一処に馳
集らせしとの謀なり。然して後幸隆は諸角豊後守
昌清・浅利式部丞信音が勢を引率して榊の道へ押出し
葛尾の路次を取切たり。義清の兵・敗走して主の行方を
求めんとせしに真田が偽兵に惑はされて爰彼と奔走
騎のみなく更に義清に廻り合ざれば。義清弥無勢なる
が纔にて・兵を立られ葛尾の本道に掛るをも得ず。上田
原を北西の筑摩川の西の方を・猿ケ馬場の峠の下へ出
桑原村より帰へんとせしに・此路には浦野・屋代等と真

田が謀すこれて義清を遮り止めんと・切所々々に掻楯かく
待かけしかば義清遂に葛尾へ帰るへき路を拒かれ・古市
より水内郡の深山路をへて落ゆきたり
天文七年・海野幸義・村上義清の為に討死し・弾正幸隆
上田を去て上州に客居し・山本晴幸は駿州に寓居し
晴信朝臣に遇て終に復讐の素懐を遂・村上義清を越
後に走らしめ累代の本領に帰るに至て・十年をへて
漫に士卒を害せし後に衆庶を労せ数に及ぶ。其功
留侯に減せしと云へし。留侯張良・仇を秦に報せんと
なく・兵を漢高祖に借て五世韓に相たる恩を當に・然
も身に堅甲を被らず・手に利兵を握らず取し秦を滅し

楚を殪し天下の民を安くし萬戸の冨を保ちたる迄
十七年に及ふ幸隆に比ふれは遅きこと七年と云へし
但留侯の智と云共博浪沙に狙撃ときハ克こと能はす
漢高祖と韓信とを待て而後志を得るに至る幸隆は
然るに相似たる奇計良策ありと云共真田に蟄せる際
ハ是を施すへき便宜なく晴信朝臣と晴幸に遇て後
智を放ち計を逞くするひまを得たり英雄の屈伸に古
一致と云へし
義清の兵士右往左往に散乱し隊伍整さりしかは甲
州勢思のまゝに分捕し勝盛大か處へ幸隆走り来りて
晴信朝臣に申けるには村上一定越後へ落行て長尾を憑

と覚え今の長尾ハ天文七年正月十一日越中國旃檀
野にて討れたる長尾六郎為景か四男にて父か討れ
し頃ハ僅に九歳と聞侍りし名をは虎千代と申せ
しなり（一書に猿千代とあり但猿千代ハ輝虎の兄左平次景房の童名なり）十三歳の時に
元服して喜平次景虎と云其歳三月十三日泥田常陸介
父子謀叛を起し景虎の兄平蔵景康左平次景房二人を
殺し景虎も危くかりしか小島勘左衛門岸六助心を
合せ二ノ門番所の板敷の下へ隠し泥田か追手を欺き
夜に入て林泉寺へ移しそれより栃尾の常安寺へ落行
本荘美作守を初として舊功の老兵を催促し天文十三
年十五歳にて泥田常陸介と軍して是に打勝兄二人の

怨を報じ、分國の兵共の眼を覺し、同十五年十七歳にて
越中國へ切入り、父為景の弔合戰なして弓矢の勢を隣國に
示し、誉を遠近に揚げれば、若者なれども今年は十八歳なるが
勇し、士卒の進退は幾千餘騎をも自由に引廻して天の授
る良將なり。勝敗の機を勘會して合戰の圖を納得せば
は容易く一味せられんや。義父村上と合体せば、是より
度々打出て、甲州武士の武者風を候さんと為べし。構へ
内甲を見透されざる様に御計畧然るべく候と申せし
かば、晴信朝臣いしくも議りけると、深く甘心ありて
信州の諸士らは、それぞれ持場々の用心を嚴重に沙汰し付ら
れて甲府へ凱陣ましましき。」實に幸隆が策りし如く

義清越後へ落行、長尾が居城、頸城郡春日山に到り、一向
に頼よしを述ければ、景虎對面して上田原の合戰の次
第を尋ね、然後に定めて聞も及されけらん。某が父の
仇、越中・加賀・能登の若共を斬平げれば、本意と為
いへ、數年北國にありの、出陣なく戰を挑しれば、頼思ふ
との一言、閣棄になく覺えはへ、甲信の武士が意趣は
おけるとも、近き内に水内・埴科の際へ出陣し、晴信と一
合戰なして、新羅三郎以來取傳へしと云ふ家軍法を試れ
べしと領掌れ。
武田家の軍法ども山本晴幸に起しなり。世人皆危と云
共、然らず。新羅三郎より以降、晴信朝臣に及ばまで廿七

皇朝軍法乃祖

天武天皇十二年十一月丁亥四日
諸國に詔して陣法を
習しむと日本書紀
に見えたり

天皇天文
遁甲にくはしくまし
ませし由書紀にも也
去れハ孤虚の法なとも
天皇の餘恩と云へし

大和國添下郡
金剛山寺に
天皇御陵あり
御影あり今
其に欽寫
せる所と
おなし

近院右大臣能有公

甲斐源氏に相承せる
軍禮 軍法 孤虚 遁甲
六壬 太一の式こそ公の
遺法なり

筆者
廣貴
と云

代相傳せし軍禮射禮ありし是へ近院右大臣公能有より桃
園親王 常陸太守 貞純親王 へ傳たまひし遺訓なりとかや抑近院
の六府と申かは文徳天皇の皇子にて清和天皇の
庶兄に在まして武藝を好ませ給ひ陳列の法より騎馬
の習ひ戎具の備城隍烽火の制まで内外武官に職
とせし典故軍團防衛の考選悉く是を傳へ給ひしと
なれば其武田家に傳へし書を考ふるに 皇朝の軍法
天照大神の千箭又百箭の靭を背ひ負し稜威の高鞆
を臂ちに蕃弓彇振起し劒柄を握り素戔嗚尊を親ら
迎防禦ましくけるを始めとし 皇孫天津彦彦火瓊瓊
杵尊の葦原中國の邪神を撥平給ひて經津主神と武

甕速神を先遣となし次て 皇孫天降給ふに上中下
三軍の制と相同し 神武天皇東征の時親諸皇子の
舟師を帥ゐ給ふと云ふ 天皇親将とならせ給ふ始なり
其後 崇神天皇十年九月九日甲午大彦命を北陸に
武渟川別を東海に吉備津彦を西道に丹波の道主命
を丹波に遣せし教を受さる者あらば兵を挙て是を
伐と詔のらし将軍と為給ふと云り是将軍の名を
人臣に授けられし初なり但天子又兵と云に微くば
将軍の外に天皇親将の一軍を置れしと知るべし又
垂仁天皇の五年皇后の母兄狭穂彦王を撃せ給ひし
時近縣卒を發て上毛野君遠祖八綱田を将軍となさ

是れは即天皇親将の軍を發し假に八綱田に授給
ひしと同じ　仲哀天皇の熊襲を征し給ふ時にも中臣
烏賊津連大三輪大友主君物部膽咋連大伴武以連の
四大夫従へり是にも亦親将の軍と五部なるを獨爲ふ
神功皇后の新羅を征し給ふ時は三軍と為給ひ金鼓
の節と旌旗の列を整へ給ひ荒魂の先鋒と和魂の船
鎮を定めて後に財土を威服せし兇ら追き跡と也
神兵を親師ありし上の故し是より後と云とも亦
斯制に違ふ事無りしに雄略天皇の御宇平群臣眞
鳥を大臣となし大伴連室屋物部連目を大連と為れ
大臣と共に親師ありて軍に伴部物部の二部を召

たまふ是伴部は靫部なる弓部物部は兵部なる刀剣
部と知るべし斯て　文武天皇の大寶年に令を頒たまひし
時左右兵衛府に兵衛八百人左右衛士府左右衛門府
に衛士二千人を配せらる都合八千人に及ぶ兵士千人以上の主
帳二人を置と軍防令に見ゆ然るに衛士府衛門府に
大志二人少志二人を置る志と主帳と職掌同じ故に志は人に衛士二千人以上と知べき也
是宮衛の直兵なり設令征伐の事
あらば臨時に大将軍を任し其兵は國々の軍團に徴
る但一萬人以上に将軍一人副将軍二人軍監二人軍
曹四人録事四人を補し三萬人は大将軍一人と定ら
る然れば此時も三軍の制となら猶たり蓋親師の直兵
は宮掖の禁衛に供給せるのみにして征伐に従ふを

なし朝家乃軍禮一變せし如形乃且大将軍を擧る
ヿ其門望を簡擇ひ其乃譜第を輪轉き蓋日本武尊の
征夷乃任を膺られしより以降道臣命豊日命健日命
武持連室屋連談連金村連と累代相承ありて軍務を執
れし坂上犬養綿田丸田村丸父子三世武勇を以て著
れし類是なり然るに弘仁天長より後貞觀に至て
時ハ又代年ハ紀に餘て文質暗に遷り沿革そのゆ
から至り成規故實應るく弛廢せんと以貞觀格及
ひ貞觀臨時格乃選ある所以なり然ども近衛右府に能有
衛府に帥としく参議せられし桃園親王乃子孫それ兵
權を握せまいて日本武尊の胤嗣世々大連たりし故

實に從ひけるならん然共遂に兵權桃園親王の孫
支に歸し萬世一統の洪基ありて那照せしことを勝何
をへし

是歳十月初旬幸隆ろ間諜越後國より返歸て景虎既に
義清に同心ありて出陣の用意專なる由を語しかば幸隆
ハ雲水の禅僧と碁を圍居けるが手段の工夫に餘念
なく打入更に東西の應答もせざ序あしとや思ひけん
間諜も傍に退へり良ありて碁を圍終りける時近侍ぬ
云々と再報告るを聞て何とる云越後の景虎村上に
同心ありて打出なとも景虎の軍配ぐとひ鬼神なりとも
何程のとかあるへき此度に於ての我等ら一手を以て

有無の一戦を遂べき所なり而て其用意あるへしと觸流
しけるは海野の一類我も〳〵と打立て岩尾の城へ馳集
る幸隆着到を披見して乃ち一類の老若に向て申さ
るゝは催促に従て速に馳参らるゝ条偏に祖先の兩
誕したまふと忝覚えはなり抑當家の太祖滋野親王に
縣郡に下向ましけるより以降歳は六百に及十餘年を加
へ代は廿に九を餘さず本郡の地主として相傳更に
違論なかりしに村上義清が為に其父幸義を討れ所領
を掠奪せられ他國へ浪人して若干の年月を送り武田
晴信朝臣の旗旒に屬て衛本國へ歸られたるに一城の主
になり着てはへ然ば方々は其の流浪ましくはひし時にも

一飯の芳恩も報く他に御覧して一門同姓の好は悉果
き勢あらんにやと存けるに如斯も聚しく打揃も也まへ
ぞ幸隆を援まさんとの素意にはあらず一定甲州方の
勝軍となさんとぞ面々の胸裏に思よら世給へなき故と知
まくは如斯ぞは今度の合戦に於て味方打勝はさん事を
掌上に観ごくまは但景虎は剛強の勇将の猛ら若氣に
まかせ過たる氣象なりしが信州に入給いなやまず民屋
を放火し御村を亂妨し合戦を挑む舍し其時面々の居
所に引籠り運を両端に窺ふものと見せ給ふ舍し然ば
景虎殿々に備を立なから猶も勇氣を示さんと甲州方
特城たな小諸近くまくも押来るも必定なりらん何にも

しく。海野平より偽り引出しなば。味方ハ案内知たる境域
なれバ。越後勢を迫て追攻て快く一戦を遂んに勝軍せ
むこと疑ひなく覚え候。併此ハ幸隆が短慮の愚案にて候
面々の異見に聞まほしく候と云ハ。何れも真田殿の討策
に従ひ無きにて候と色代して各々の居城へ。一先引返
す。然て後に幸隆使者を甲府へ馳て。景虎軍勢催促の様
を告かり海野平の絵図を注進したりけれバ。晴信朝臣
山本晴幸をよび。小幡虎盛・原虎胤等に此を示し。猶も
合戦の評定を詢けるが。三人ともに同しく答申やう
景虎若気にて軍をも急らせ候とも。流石宿老の侍大将
も又六七人は無けれバ。自国の境を越てたかくと小縣

の郡まで手長に出張を為のんや。もし又真田が注進の
如く海野平まで討出たらんには。合戦は持て特にと申
為て候。且当月九日に春日山を発足し候ても。十四五日
の頃ならでハ。海野まで参着しがたからんか。其日積より
早く候ても。更に合戦あるへからずと申候　此一節海野平合戦覚書に従て詞を删定す
景虎の居城ハ越後国頸城郡春日山なり是より高田
荒井・松崎・関の山・小田切・関川・野尻に至て十四里。野尻
を越後・信濃の境とす。野尻・柏原・牟礼・荒町を経て善
光寺に至る六里半。善光寺より丹波島・屋代・戸倉・坂木
上田・海野に到る十二里許なり。総て卅二里半余とす。

岩尾城軍議

敵地の繪図
をつくり
味方の
兵士に
示して
合戦の
方便と
すること
軍防令より出たり

景虎の人数六千餘と云。六千人の小荷駄馬の大数を算るに。軍防令に云ハ兵士十人にて六駄馬と云ハ。六千人に三千六百駄馬を充るなり。然に甲越の人数積りにて又十騎一備。士大将一人。歩若黨卅人。小者中間合五十人を合て八十一人に。駄馬五足。駄夫廿人なりと云に依ハ。六千人に。凡駄馬三百七十。又駄夫千四百八十人と知る。都合人数七千四百八十餘人。上馬七百九十足駄馬三百七十足なるを用し。此人馬の道を行なれど急くとも。一日五里餘に過べからずと積りし也。因云。天正十八年豊臣関白秀吉公の小田原を責られける時。其勢廿万餘騎。三月朔日。京都を首途ありて。十

日。三州吉田に到る。此行程五十二里餘。廿餘町なり。一日に五里餘の積と志らる。

晴信朝臣。十二日申刻に。甲府を首途あるべきよし。岩尾の城へ告来りしかば。幸隆云く。十月申刻には。卯方を以て孤とし。酉方を虚とし。甲府より。韮崎ハ酉の方に當れり孤を背にして。虚を討ときは。一夫百夫に敵すと云り。必定十二日は韮崎に宿したまひ。十三日海口。海後あたりに陣せらるべし。十四日。畑。高野まで押たまひ。然らんには十五日。當城に馬を入たまふとも有べし。其の用意をなし置きなりとて。掃除以下の警衛念を入。路次まで出向ひて待かける晴信朝臣を待しく。山本晴幸。小幡虎盛。原虎胤

ぢかゞを召具して、岩尾乃城へ入ゑへバ、幸隆か孫子経
営置きれけるに、穂屋へ請し、種々に饗応し、然後に景虎か
軍配を談し、猶子細に海野乃地理を評定して、味方乃手
分を商議らせけるに、晴信朝臣幸隆を旗本の先備に組
合九子・矢沢等乃一族をば旗本と一手に置座して定ら
せけせバ、幸隆・山本・小幡・原乃三人に向つて中さう、村上
義清ハ某が父乃仇形り、海野ハ某か旧領なれバ、今度の軍
全く某一身乃大事と思ふんぞいへバ、願ふ是他乃勢を
加へられ候ハゞ、某一族共のみにて御先手を賜せれいへと所
望ありしに、餘義なく聞えけるに、晴信朝臣も三人乃老
将も、其せを許されけれバ、十六日乃戌刻に晴信朝臣小諸に

入ゑへは、景虎乃先陣も、坂木乃南に馳付て、甲越両陣乃
間八里餘を隔たりし、爰に景虎の先陣、長尾正景・晴信朝臣
乃小諸乃着陣ありけるよしを伝へ聞、急ぎ海野へ馳向
ひ、甲州勢のいまだ打寄さる以前に備を立んとあせる
と云とも、地理不案内にして、進退合期せず、兎角さる内
に、小山田備中守乃手乃者、祢津・矢沢乃路をさし塞いで
大旗・小旗共乃数をしらべ、段々に備をたてゝ押寄する
千曲川に添て抱沢瀉乃旗を差て最先に進めば、郡内乃
小山田左兵衛尉なるべし、其の跡ハ、安房左衛門尉、小
曽甚八・塩尻・和田・福沢・内村等信州先方乃衆、一勢に引
ぞ桜井・加沢乃宿々にて、栗原左衛門佐昌清乃勢を

先として須田・室賀・綿内・井上なと云信州の兵士共の数
うち續きたれバ景虎の先陣意ぞくのほかに猛くも屈るとき
とも路次の障おほくして十八日の晩方に上田の東な
ある岩鼻・瀬沢に着陣し大篝いくところを焼せけれバ烽
煙天を焦し駿し幸隆これを見てさもや思ひけんと
景虎あまく打おとしハ猪武者の死生不知の振舞さ
こそ計なりけれ但し其ハ旗本の先手なり景虎旗
本をもつて寄合せられなバ一番に打合て勝負を争ふ所
なれバ兼てその用意をべしとて兵糧をもつて馬を秣
かるく持扣たりし翌日ハ十九日の早天に甲越の軍勢二
万二千余人海野の原に打臨んで陣をとりて相待し也霜餘
の暁景といへ爰まで浅間の山陰なれバ朝霧ふかくして
互にかく計り近々と寄たるを知ざりしが甲州勢ハ本
陣の後より弓手の方へ雁行に備を立れバ原加賀守昌
俊九十余騎を引ゐて跡備をまかせたり是まで幸隆が
如く景虎龍の丸備に人数を配り自身旗本にて甲州の
旗本に打合べく議したりけることを聞ぬ内々山本晴
幸に告知せたりしかバ其設はかくして組合せしなり良
時うつりしほどに日も既に午の刻余所のあらしに霧晴て
絶々に両陣の旗ハ色々に吹なびき尾花がくれにも物具
の光てりそふ野辺の露かぜより先にまづ落ん景色を
景虎もや恃りし敵の備の立やう尋常ならん味方の内

に野心のものあるなく甲州方へ内通せしとおぼえたり
謀もなく時を移さば軍利あらじ。然ども斯対陣して一戦に
も及ばずして引返さんも本意ならず。村上義清が思はん処
もはづかし。且は晴信と、ちぢめくの弓矢なり。意せよや
兵士どもと諸手へ乗廻りて下知をなせば長尾正景家を
なと云まくり、鉄砲を打掛砲の下より長柄の鑓の穂先
を揃ろへ、小山田備中守の手へ突掛り一騎もせず責闘
ふ。小山田が手に相木望月もしりぞくより幸隆が計略を能
知たりければ爰を先途と防ぎしが程に正景たちまちに
打まけ二町ばかりしりぞきぬ。その次なる直江山城守兼続の養
父柿崎和泉守。安田上総介軍は斯ときこれと叫りて揃え。

小山田左兵衛尉の備へ面もふらず切て掛る。小山田戦
まけて引退けむ。栗原左兵衛尉詮忠急ぎ太鼓を撃て横
合より越後の甘糟近江守が備へ馳向ふ。如斯とある所に
景虎の旗本に揚螺を吹立て清けなる武者二騎来隊を
とりて馳廻り手軽く諸勢を引上たりけるのちに能々同紀
せば景虎と宇佐美駿河守良勝なりとかや。晴幸あまたを
見て敵の強らず引立ずに長追すべからず。小山田
栗原の勢を引上させ玉へどもやゝもすれば中々手よりも百
足の指物の兵十二人ちりぢり散て下知を待えしかば忽
追止まりて付募ず。午刻より未の半までの合戦に越
後の勢を打取事二百六十三人。甲州方にも百三十一人

救ひたまへと。其日申の刻に勝鬨を執行ありて。晴信朝臣
小室へ馬を入玉ふ。爰に幸隆は今度景虎の旗本へ斬掛
り村上義清を撃て多年の蟄懐をはらさんと思ひしに
景虎は名高き勇将なれば。甲州方の備立を見て軍を大車
にあはひかへ。軽々しきはたらきをせず。暴に人数を引上
しかバ。幸隆はことに寶の山に入て手をむなしく帰る心
地してよみに残念に思ひ。何にもして村上を打ばやと
て。手の者十に人を引率し。坂木の道を追掛しかども
越後勢はや疾うち過ぎて程遠く隔てたり。されバ殿の
作法厳重なれば。たやすく方便にかけがたきを以て幸隆
ちからなくして引還し。又も計策をめぐらさんとて

小室の城に出仕して今度景虎とはじめての合戦に勝
利を得たまひし事をまうして晴信朝臣軍令の正しく士卒を
よく鍛錬せられし故なりと悦を賀し申すには。晴信朝臣
は却て幸隆が子細に越後の軍略を注進せしによりて
味方の備組に便よく一戦に勁敵を打破るを得しなり
は真田の勲功なれば莫大なり。猶此の上油断なく方便を
施したまへと褒賞他に殊なりしによりて。幸隆をはじめ海
野の一類まで悉く喜悦の眉を開き勇氣凛々として。此
後の合戦に於ては更に他の加勢を及ばせず。景虎を我打
捕て勧賞にあづからんと閧きあひて身その分限に用意
をなしけ。是よりのち。埴科更級両郡をもとく

国立公文書館
National Archives of Japan

平均しく人質を遣り無二の甲州方となりたりしは同月
廿八日に晴信朝臣甲府へ馬を入れしには幸隆は岩尾に
還る様しく小山田飯富の両将に暇乞し其夜ひそかに
姿を山伏に變じ景虎の陣拂せし跡をと見送りて越後
の國まで赴き關山松崎など云処に至り猶行々て春日
山の路を問しとき一人の老嫗が熟と幸隆を打見て云
やう昨日の暮つかた御房の如く春日山へ行路を問人
の有りしが此先の小溝にて斬たれたり然らずは元来し
かたへ還りたまへ様なく命失ひて何かせんと云幸隆然
也を聞其八春日山の毘沙門天王へ祈願あらば叶はぬ
ことの有く旅立しものの如何せば行なべしやと歎りて

云ば又一人の壯士が来り和僧も甲州方の間諜ならん
命二つあるやらし實に春日山へ行んとならば毘沙門
天へ備ふ通く信施物有んとし持参せしまへと云幸隆は
頗く用意せし金銀の封じたるを出して見せければ壯士
初て真の山伏なりと思へば様子なく然ば其案內をへし
と云て先に立て頻に春日山に至り毘沙門天を禮し
封金銀を献納し下向の後彼壯士云らく遠方より氣
詣なし玉ひければ此城の様を見物あるかし元より
立て行が子細なくいと云によりて跡に續きて行く實は
門の番士見咎むるもなし曲輪々々殘りなく見物して
まく元の路より出て帰る時に幸隆云く思の外に毘沙門

天に詣でゝ今まで有りへしと為し。次で羽黒山の年籠せん
と思へれ。末々より将諍鉢諍に至らまく出に和り願く
まで我のかたへ、等閑しくあるまじと請を聞て彼壮士、左の
ミ化玉ふなりよ。越後の由言人なりまで、あきまみを経
の癡呆をいくし玉へと云ふまて見返りもせで、異路を
さしくて走る。幸隆は心中に大におどろき足を空て立去
て急くれども、野尻の里をおもあもんとせし時、人数の
多少まで志らで、鑓長刀の鞘をはづして追来る。幸隆今
まで遁れがたし。然ども死まで易し、幾度もかくまで見せや
と思ひ、忽ち山伏の装束を脱で畦間に立て案山子に打着
名を鎮壓となして、沼に志づめ、自身は養笠をまとい閑々と

に鉄うちたゝて立去ぬ。追手の兵士あまた来りて沼の中に
人陥たりと思ひ、立留りて能く見れば山伏なりさうは彼
遁れがたきを知て入水せしなり。あな哀れや死する骸
引揚るに及ばずとて追手まさに引返へし、さて其後
幸隆からうじて命助かりて信濃國の人を得て是を待
日数経て岩尾の城に帰り、右の事を越後より来書あ
り真田弾正殿と上書して差し遣はし名苗字なし。思ひ
よらぬと披き見るに、先時に山伏の姿に扮して我の見物
に成越ひしかば、我はまた春日山の体を処んとて
ひ、彼毘沙門の賽物は還し入まらせんと、て封金その
まゝ還し来れり。幸隆是より彼案内し川中島壮士

を徒者ならずと疑ひしかども誰なるらんと又文をとひ
寄せ見るにゆくは景虎なくなりけるにや人の云に違
はず勇あまりありて心たらく軽々しき性なれば殊
らはまさに計策をなすなど定て方便あれと独笑して彼書状
を元の如く巻収て封じ使に別に一筆書そへて文袋に
入罪あるべく誅べき者を飛脚に仕立てかくしやれ潜に跡
をおそひ軽き野臥の里の者を斬殺て携たる
なる野臥の里人是を見て怪みて春日山の注進せし
かは景虎彼の文を取寄て見るに真田が家長より景虎
家中某へ宛て幸隆いまだ其国の生れて岩尾に帰はをへ
其方へ参ればその時御届あるべしと書たれば景虎忽に
眼を瞋らし歯を切り太刀を握て立あがり近習の列を
見廻し何とか思ひけんつと奥へ入て二日三日の程は
物狂はしき体なく大息ついて居たりけるが書状を見
てより七日に当りける日何事をか思ひ得たりけん俄
笑て手を拍ああ口惜し真田めが方便にて我あぶな
く我手足に等しき故老の心中を疑ひしぞ憂悩の
至我弓矢を取て真田如きに労ならへしとは思も孫とは
智謀は七日の後もあれ真田が生てあらんなどは我信
列を討取しと人々かたらし如何にかしく幸隆を亡ぼ
さんと胸中に工夫を凝しけるに然るに幸隆が
一時の反間に中られて越後の君臣互に疑ふ端を引

出しと雖も（此一節信列芦田曜長其乃家記に出）程なく越後ハ雪降積り
て人馬乃通ひ容易からず景虎ハ蟠龍乃幽淵ニ蟠ま
るがりひを雖しく春日山乃雪室に引こもれバ信濃境
乃関の戸さしく商客乃往来さへむつかしく成ゆく侭
に自然と越後押乃路ハ用心せし両軍の諸士も徒然に
堪かね打揃く出けれども催ひまく雪中に雉子を追
捕猟なとしく遊ひを見て幸隆雪の上を走に便よき藁
沓を案じ出し是を履て雉子を追に果して獲物多し
去のバ皆人おもひおもひ遂には常に履もちゆる事と
こはまで深雪乃山路とハ云へ共走廻る事自由を得しか
バ幸隆ひとり黙笑してかくてハ又用ゆる処あるべし

不思議なりけるが雉子追ひの雖と折節わびぬ居きけるに
雖も（此一節信列松本禰津氏家傳に出）兎角も數うちに年暮て天文ハ十
七年になりぬ幸隆去とし迄ハ父が討死し後十一年
に當り十干ハ一回せしに猶父が仇を報ぜんと云共
歎き志だく越後へ往来して村上義清を覗がへと云共
景虎もよく此意を悟りよく村上を保護せしかど更に真
田さらに間を得ず然共景虎又月下旬信州へ發向の
陣觸ありまく諸士ともく不用意なりしを聞き海し内
山小室へ告来りしかバ飯富兵部が浦虎昌早馬を甲府
へ立て是を注進しけれバ晴信朝夙に諏訪伊奈両郡領墨乃為
に又同七日甲府を首途なしく留守乃程なりけれバ

甲府より諏訪へ。飛脚を立て真田が注進状を奉る晴信
朝臣状を見終りて景虎二度まで殺気を偏に去年の恥を雪
ざるが故乃ことあらじ。此度小縣・両科の諸士乃内に。幸隆
が。謀によりて降りし長尾へ内通いたす者乃出来しを景虎ま
づ我をひきて遠々と計るると覚えてより。然ば例乃逸雄
乃豪氣と知勇大息は緩々とあしらひて退屈させなば。
自然と氣屈して遂に勝利を得べきを鏡にかけて見るが
如し。但しはじめより真田が心中に景虎と有無乃合戦を
挑まんと。思ひ設けし事を知るに。晴信出馬延引せば。真田と
合戦に及ぶに極し。真田元来村上を不戴天乃讎とおもへば
其肉を喰ひ。其皮に寝處せんと思ふならめ故に一朝乃謀

て。真田軍を仕損じなば晴信が鋒乃弱りなり。急げや若者と
云ふまゝに。諏訪より直に打立て。和田峠を馳越。長久保を
東へ押内山乃城に入。ちかくに後陣乃兵士を待けん
とまばらく人馬乃息をつがせ。兵粮秣の支度し。小縣・両科
乃諸士へ牒し合せ。山々峯々に會圖乃狼火を定め景虎
の出勢を今やおそしと待せらる。幸隆は岩尾乃城乃掃除丁
寧に致し晴信朝臣乃本陣内山へ出仕し。景虎今年は
寺尾・宮崎より地蔵峠を越て戸石乃邊へ打出るうと
おぼえ候。其乃筋々へむけて御計畧はいかゞやと申しゝに
より晴信朝臣さらば戸石に向て手配せんにや。岩尾へ
やがて本陣を移さるべし。其上にて人數くばりを議せ

らまんべしとて幸隆をハ返されけり幸隆岩尾に還りて
十二歳になる長子小太郎を使として戸石より海野小
室あたりの地図を晴信朝臣のまします内山の城へ進
せたりしに晴信朝臣面會ありて其の容儀骨法など
尋常ならず見えしかば大に賞美せられ頓て元服の
儀式をとり行へられ武田重代の信の字を與へ真田源
太左衛門尉信綱と名乗せられ紺糸の鎧の緋料に新調
ありしに美濃関鍛冶の鍛たる太刀一腰栗毛の馬一疋
を引出されしかば幸隆夫婦をはじめ郎等どもに至る
まで晴信朝臣の士を重んじ禮節を厚くしてせらるゝを感
歎して死力を致さんとおもはぬものなかりけり

国立公文書館
National Archives of Japan